

源黃集  
中編

76
3258
2





一代男 天和二年 印本 二之卷云「小塩山の名本落花」

一の男達其比捕手居合しやうと世の風俗も糸髪買ふしやうと云は

終に髪上髪の上にて袖下九寸たつた。漆分の組帯。どろけの長股指あざし

れり人形は是王城小住人の有様今にいくと昔と捨るをう北野と詣で

梅とらじ大谷小行て者と一折鳥部山の煙と五つつこの吸吸筒小者

つたん毛巾着ひひびくをある云々」此文昔繪とこれ其比と云は慶長元和乃

比とてこの此一代男の西鶴の作なり此人の寛永十九年の生まぬれ幼時

まねきたるも成のさうなれば證するもさうさうさうさう漆分の組帯と終乃の

この帯のさう致當時の男だてなをも組帯とびとびたるもやわん同書五之卷

小筑前折町の事とさる処小組帯屋と名目とさる當時の筑前ふく組

帯と制一たるなり○さて組の名古屋帯の便利さうさうゆゑ寛永以後いやく

すられたるも貞享より享保の比乃草紙とに往く見えてる。組帯名古屋

織の帯系打の平帯名古屋打の房帯などさるもの寛永以前の古制の如き丸打

何で平打とて今云系とさるは類なり

万金産業袋 享保十七年印本 卷之四云「名古屋織男女の帯系さうさうあり女帯の総つき

幅四寸さる男帯の幅二寸五分さる女帯さうさうの只一枚ふわりとあり名古

屋織の六袋打やういづれも夏帯から」とあり古名のさうなづら古制また

さう知るなり

○再按に竹齋物語 寛永中の書 云折ふ上人らるしめてそれふさうな今ゆり

出たさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

上人さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう





香疾カキのい又あるはカキの訓は樺焼カキの字と當てて樺皮カキに似たりとの説

と云ふけれど下しうに羽織カキの字と當てさぬぐ不替カキの説といふさひうんカキ 新儀カキ 原明衛カキの作は後三條院東宮の時時明尚白髪あり由の牙カキ 〇今女カキ言小豆カキ膏カキをか久人と

いふもつれ言カキ 饅頭屋節用カキ 衣食部カキ 白壁カキ 〇かくれ如く見えたり又海人カキ 菜芥カキ

小坂カキの供所酒カキの九軒餅カキからん味カキとむむ。塩カキの志ら丸の豆カキ磨カキかへ素カキ麩カキはほそ見え

松茸カキはまる。鯉カキのこり。射カキのふり。スカキと見えたりを今大和カキと見えたりといふは凡カキ三

百二三十年前カキ既カキよりいへたる異名カキ 〇海人カキ 菜芥カキ 〇長亨二年の 奥書ありは書も少カキ前カキ

挑燈カキれども詳カキかゝるごと古今夷曲集 客カキにゆきを送る挑燈カキはまゝにけけ秘カキといふ

月景カキ 定家卿カキよりいへるは此歌古書カキふ所見なれを證カキといふ 〇秋乃夜長物語

後堀河院カキは清宇カキは西山カキのひの律師カキといふ人三井寺カキの梅若カキといふ児カキと意同寺の 或方カキといへ居カキといへ此児其坊カキといへ行カキといへけ。糸カキに云カキ「け行カキといへつと月

西ふめらカキるもいへらといへる。〇韓垣カキ 戸カキ 〇或れは瓜カキ人カキありて和カキする書院カキは杉障カキ子

より遠カキはんてたつたはしはききりふなり。うたふ立カキくまふのらやいん。〇螢カキを

入カキてきりたりと光カキのさかればけらとみきん志カキのさかるといふやんらとみれば

ていそとていんやとつりていんやんやんといふはれを私カキていふ。〇書院カキのいといふやん

なまはさぬれいんやんといふはれをいんやんといふはれをいんやんといふはれをいんやん

らやうらんの名目カキいんやんといふはれをいんやんといふはれをいんやんといふはれをいんやん

下カキ按カキふきよふは魚綾カキの誤カキも綾カキは字音カキもまうまうと作カキ又れはみ。〇唐制カキは挑燈カキは

なひく制カキする綾カキといふはれをいんやんといふはれをいんやんといふはれをいんやん

まうくすめいもむかり蓋カキのさへ仁具カキもありんやんやん考カキへ。〇當時挑燈カキの名目カキはあはれ

常に用カキる物カキといへるはかたに玄奘カキの作の庭訓カキ往來カキ 〇挑燈カキの名目カキはあはれ









○万治四年印本  
 載る音



○行燈 五

○宝暦五年印本  
 諸家記  
 如當時挑灯  
 用ひ



行燈は始詳々以下学集

安燈篋行燈挑燈

鎌倉年中行事 徳。行列に續

松行燈と持せしるる

按るに行燈元家内と名魚物にのりて續松へ便わ

とゆふ灯火はひひて風とあてん持りて為に造出たるものか一然則字義

りて民家の端近く風とあてゆふに灯火はひひて便しとせん後小燈臺のつく

用ひたるものか一永正御撰何曾のうらに法僧は寮の物とすれりて

何んぞと解何曾なり法僧の寮の庵の物とすれりて鈍之を何んぞとす古言多

下学集 小行燈とゆふはつけれ後上木とる時乃とるまゝ一貞徳乃御傘

小行燈とゆふはつけれ

女峰集 依見鐘木町炬松とく世とゆふ

仍燈である我かる夜は月面 嵐雪

くく心と鐘木町とく 續松と用ひ元禄は比行燈とそゆふゆふと

翁草 卷れ五よ。古老の物語は今世にのる調度ゆふとる皆あるまはゆふと

なふあゆ行燈なとるゆふのあはれ今世に如く挑手と中は釣へ近きゆふなり昔は路次

行燈は如く底板小灯臺と並た風速州とゆふ丸行燈とそゆふゆふと

臺と中は釣へ始まるる此説は如く行燈は古製の今茶人の用る廬地行燈と

物と見く知く一其製作持歩く便くされと元家内小と及重く造せし  
 元禄二年印本  
 本朝櫻陰比事  
 野載前  
 行燈用以來燭しつる唐土行燈此方乃  
 挑灯れしつる

當時述きつる事ありけり  
 行燈と用ひし今も諸國に  
 行燈と用ひし今も諸國に  
 行燈と用ひし今も諸國に



今茶人用  
 唐土行燈  
 此方乃

笠下ふ布と垂

秋齋問語 空曆三年印本  
 卷之二 市女笠と足るをばつひの女下女ハ手ぬくの事一ひし  
 布と頰はく其く不笠とのちたり 職人歌合の女乃頰はく布と

秋齋問語  
 所載享祿二年古画

享祿二年より  
 文化十年より  
 享祿二年より  
 文化十年より

秋齋問語  
 所載享祿二年古画

一向ノ下女ノテイ  
 ナルヘシ袋ヲモタ  
 スルハ古風ノ一々

ソハヅカハスル女トミヘ  
 タリ下女ハカミヲサゲ  
 ソハツカヘテイハカミヲ  
 サクルトイヘトモカ  
 ヲラハカケタリ

主人ノテイ今テ  
 カツキテイノモノヨキ  
 タルカウニキタルハ大  
 ウチキノテイトミヘタリ  
 市女笠ハカミノソコ子  
 サルタメカ





幕後くー延宝六年刻

附合の白  
ふくめんぬり塗笠志づれ乃杖

お意

幕後くー延宝六年刻  
附合の白  
ふくめんぬり塗笠志づれ乃杖

二代男 貞享元卷之五小云四十七八の噂を聞て露草色比布子にむしぬす

塗笠ふくめんぬり此杖と付てうた綿帽子と寺礼礼扇と持てく

貞享比より塗笠へやとせぬる歎 女用訓蒙番履 元禄元卷之四小云人比心のち泳

衣故伊達姿真勝れ菅笠の帯追風ゆり茶をたりのる人者女郎

元禄れくめり菅笠とせぬるのちゆりぬす

其袋 嵐雪撰元禄三年刻

菅笠や男若弱なる花乃山

百里

當時の男れ菅笠のちゆりぬす 俗はれく 元禄八卷之四小云四十日入る

女れむしと今に兵庫曲おしげは浅黄みろく裏に下云くは華足袋より之きの紐を

つけぬり塗笠ふくめんぬり此杖と付てうた綿帽子と寺礼礼扇と持てく

當時の塗笠は足袋共とせぬる古風ふりしとゆりぬす 同書水口は八兵衛が此木也

れら塗に千とびとりの紙紐と付てうた綿帽子と寺礼礼扇と持てく

俳諧日本國 元禄十六年印本

附合の白  
丸塗笠とせぬるまきとど貫

塚  
友重

是等も當時塗笠れおしりて一證之松の葉 元禄十卷 ぬり塗笠のちゆりぬす

七人ぬりぬすのちゆりぬすのちゆりぬすのちゆりぬすのちゆりぬすのちゆりぬす

きしりてく 此杖と付てうた綿帽子と寺礼礼扇と持てく

花見車

元禄十五年印本  
松蘿館藏本

ぬりぬすのちゆりぬすのちゆりぬすのちゆりぬすのちゆりぬす

朱拙

和漢三才圖會 塗笠 用薄片板紙張之漆黒色出於京師及大坂 同書越前

土産之部 塗笠 出於 我衣 古老れおしりて一證之松の葉 元禄十卷 ぬり塗笠のちゆりぬす

牡丹梅椿水仙桔梗燕子花等と画たり ぬりぬすのちゆりぬすのちゆりぬすのちゆりぬす



○桔梗笠

八

天子草 寛永十年刻

形 摺りや花もり 衣 桔梗笠

徳元

毛吹草 正保四年刻

さく花のまゝとちあはれ 桔梗笠

吉政

玉海集 明暦二年刻

花のうで雨にのくや 桔梗笠

喜雅

口より草 明暦二年刻

花いけの取とゆくとや 桔梗笠

作者不知

物忘草 明暦三年刻

時花ひや 蝶 桔梗笠

蝶の子

歌海集 寛文五年刻

花のうで 葉と 桔梗笠

作者不知

右れ如くありて俳諧れ句集に桔梗笠とありて左の古圖と得て其形を知ぬ。又  
とちあはれひのれいりか形れものもとさうり一に左の古圖と得て其形を知ぬ。又

山井

慶安元年刻 著作堂藏本 小も 桔梗笠とありて左の古圖と得て其形を知ぬ。又

今も羽州秋田船越天王比船祭に左に圖に如き笠とあり

桔梗笠れかごりまど

桔梗笠古圖

貞享の比の繪に此圖あり



大神樂打の体

元禄の比の繪に此圖あり



天和貞享の比に幼杜乃繪卷の  
しらふ此圖と載たり蓋は青黄赤  
一圖ありていろどり



大神樂打の少年の体

此二人美少年乃親子の体

○浮世袋再考 九

沙金袋

山本西武撰  
明曆万治ノ比刻

塵たらく浮世袋や年一乃其

要西

此句より考ふに浮世袋ハ勝れたるひまゝ一秋齋問語云昔太刀二つ付

火打袋と三角又絶やあふ紙子又火打の名有り此説ふれと三角又絶や火打袋

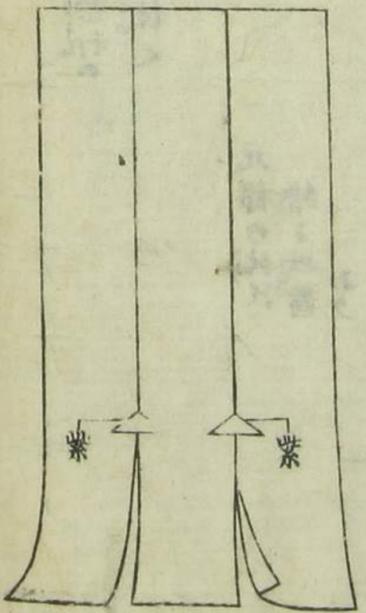
何れも浮世袋も三角ハ絶や火打袋ハ遺制を浮世とひとも單これと

おびるゆゑに名づけたるなり卯子酒 宝永六年著 卷之三昔九軒町の繁昌一なる

事とる系不亮が浮世中若く人物とおびるも一とるなりこれハ浮世袋同物と

後ハ去るも稱一なる

○昔拉女家の布を養子浮世袋とつけしものハ  
此袋ハ一々のふもこれ絶やあふ紙子三角ハ形は  
つけたるは浮世袋ハ形は似るゆゑにこれと名づるなり  
右重なるものハ如このふも一とるなり一とるハ  
此袋ハ一々のふもこれ絶やあふ紙子三角ハ形は



本朝俗語志

延享四年 卷之二云 今傾城町ハ暖簾ハ此乳と名づく乳守ハ此乳と名づく

○又童女ハ針業ハ此乳と名づく乳守ハ此乳と名づく乳守ハ此乳と名づく乳守ハ此乳と名づく

○又於女ハ此乳と名づく乳守ハ此乳と名づく乳守ハ此乳と名づく乳守ハ此乳と名づく

慶安二年著 序此文ハ一何人ハ此乳と名づく乳守ハ此乳と名づく乳守ハ此乳と名づく

如云云

新續犬筑波

七夕 此まじり船ハいさやうのひりか

正信

俳諧糸屑

元禄七年 糸之部ハ其世也 其世也 其世也 其世也 其世也 其世也 其世也 其世也

きんトむことハ男のいへる言ハ 如くトヤ 婚ハめられ人トヤ けりて云云

これ當世ノ人ト云ハ 如ク 岩佐氏ト浮世又兵衛ト云ハ 當世様ノ人物ト画

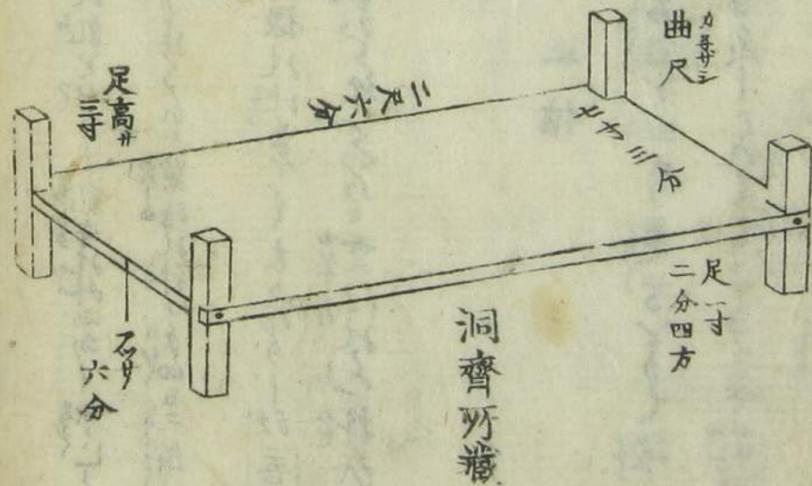
りん。又案ハ貞享ノ比ハ 物乃本。浮世笠ハ 雍州府志 貞享ハ浮世法



江戸室町の横町と浮世小路といふも昔浮世坐浮世座をとりつゝお賣りゆき  
 名もいへば今も其れがゆゑ商人のゆきを

○ 奥板の古製 卍

文政時代の酒食論といふ画卷又寛永  
 時代これ繪は此奥板といふ式正れ  
 り此奥板といふも奥板の一種乃  
 古制といふも今も京都此舊家とい  
 ふれは好事情の支臺たるも  
 又これのりしを又甲州此民家といふも  
 くれと用ゐるも奥板といふも  
 奥板といふも便利といふも



○ 大津繪の佛像 卍

元禄四年芭蕉栗津の無名庵より一時正月四日

大津繪此等のいふは何佛

のく口とありてそよ古の佛像と画くとすといふと知る下當時大津繪は  
 と持仏小掛る老れりゆふれゆふれゆふれゆふれゆふれゆふれゆふれ  
 かなとありてこれをこそ當時左に記すゆふれゆふれゆふれゆふれ

俳諧日本国 元禄十六年印本 杏花園藏本

前々 附々 前々不知 大津強し廻向してゆく新九くき 一 撃林

本朝諸士百家記

此裏店に籠園といふは七十有余此老法師あり中畧半ばゆり此棚と繪て大津  
 繪の三言とかけ一首の讚よ

絵ふゆりも木にまじりては此の絵は此の絵未だこれのいふゆふれゆふれ

○又享保十一年竹田出雲が作せし伊勢平氏年々鑑より浄瑠璃は天津繪の十三  
 佛といふこととそとそとを宝永の比まをもの仏繪と用ひ享保比まをもを散在  
 せしものゝ多きを今へててりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり  
 但今も天津の仏繪多しといへりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり

○因小云二代男

天和二年印本 詞花堂藏本

卷之三小寺泊れ傀儡の家れまといへる条に「屏風乃  
 押繪といふを花のけりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり

大東の多門を在る門が連奴といふか天津追分よりてりてりてりてりてり  
 のくもよ云く「天和比の戲子繪といふもつてりてりてりてりてり

○又五ヶ津の草紙

刻板は年号詳かりぬとてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり

卷之四に「津虎梅竹左字にまをり

枕屏風追分繪に奴が露の命と君ふらへいと赤丹にそとる赤丹にそとる  
 是等と據ふ今昔と失へりといふ大津繪といふ昔と失へりといふ大津繪の  
 花のまをりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり

大津繪佛像縮圖

總長曲尺一尺七寸 廣七寸五分強

頭と両手は木ふりて印の外に筆を  
 丹蓮華ある。

氣色



一枚の紙小上下中。一文字。風帯。此形と彩色よ  
 まをりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり

芝峯軒呀藏

天津備圖

墨

元禄三年  
庚午孟春吉旦

繪師 菱川吉共  
作首 遠近道印

奥書ニ云

元禄三年印本  
東海道之間繪圖所載  
大谷に佛繪あり有と  
云なり芭蕉は天津繪に  
元禄四年かゝることを  
一年の板行あり當時の  
おもひ即れどもふらふて  
とくふは



京山樓寫

黄土



同三尊來迎佛

此も黄土輪後先丹蓮華丹綴書  
雲朱墨寸尺おむし林前におかす

尚志堂藏

右に諸士百家記よるんえさ風関とやが  
狂歌や三歌仙も此さひあふ

四喜  
瑞法

竹

○浅葱椀 十二

昔浅葱椀より物有り 右之双紙 慶安二年 卷之上 青と相れぬくことなる事なり

此繪の河打のまつれん。河さきこころ云に「しんそくをくく慶安乃比既わし物有り

雍州府志 貞享元年 土産門云「二條の南北新町所製縹椀とす。黒漆比上縹

色并赤白の漆と以て花鳥と昼云々」原書漢文 今其制作と知るべし 二代男

貞享元年 卷之四 富老の事とす 終云「京の女惣とあきく相の静なる向ハ

年印本 浅黄椀 三町より牡丹島と云「我ら此自由の花車とす

て有りき鼻も人ふも也 狀も夢とく居ても云云」のくしをを浅黄椀の下品乃器ふ

りしづるべし 俳諧糸屑 元禄七年 浅黄椀と出せしを當時もくふ用ひし事なり

晋子十七回

淡と著 享保八年刻

前々 子ふらんやとたのむをを生

卒秋

附々 名ふも似ど好ことぬれ浅黄椀

雪点

御伽名題紙衣

元文三年印本

卷之二 浅黄椀れり云々を元文の比をも有りし 其の

今いささく名ふも聞えぬものなり 昔りし用ひし事なり 是れ今もしてあるもの

○重箱 硯蓋 十三

或書小重箱の慶長年中重箱より食籠よりとづきて始て製造とす 其の

び。今按るに重箱の衝重の遺製あり 衝重は制つて縁高とす 縁高は足と

しつて重箱と重箱と云ふなり 古重箱小肴物と細入松枝折枝かきぬるの衝重と

肴物と組入る飾と累なるものなり 肴物衝重も終つては子おけりしははははは

るに祖食籠は号に重箱より少くあるなり 下学集 明は食籠と云ふ重箱

衝重 縁高 食籠 此名と知り重箱と出さず 天素往來 明は食籠と云ふ重箱

此名見るとはしむるなり 右に或書小重箱の慶長年中始てつくりしはははは

びつたゆ多し 既小文龜本に 饅頭屋節用 小重箱は名目と云ふなり 其の



硯蓋と練る原と一の如し

○二足三文 十四

今物に價の安さ故二足三文と云ふは元金剛に價より少く  
刻梓の年号の如くも寛永の  
下之巻に「金剛に二そく三文と云ふものと云く」  
狂歌と載り金剛の草履はとひたりの。箇金剛蒙金剛板金剛種あり

○三線鼓弓は古製 十五

松比葉 元禄十 永禄の比琉球より地皮二絃に楽器と流を泉州堺の琵琶法師  
中小路より者一絃と云ふて三絃とせよと世に呼寛永より盛  
りては左に横出せる寛永正保比の古圖之永禄より寛永  
りては六十余年の古製と存し今と大異いづれの比より古近は  
名匠少く今の形はゆるぎありて○鼓弓は古製も左に  
元禄の如く三線は河原の如く今より三線は元禄の如く  
元禄の如く三線は河原の如く今より三線は元禄の如く

寛永正保比乃古画なる三線の

美少年の男子の体



津老尾の形琵琶ふ  
必たり今と大異

是れ男キト  
ナスハ之レ作  
者

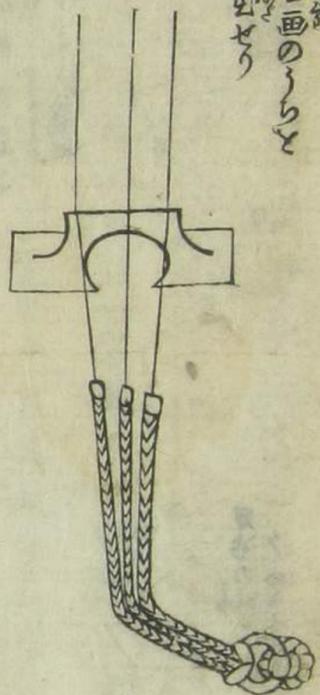
東山横馬 十四

万治年間印本  
東海道名所記  
所載



万治の比も  
今と大異

寛永此の古画のうらと  
堀妻と横出せり



○根緒まき不鑲とつけさうらへも今  
異へ盲人の機糸とつけく此鑲  
ひもかつけ用ひしと  
昔は質朴と  
なりし一



探の形  
今と大  
異後よる  
ひりくわりて  
古製は機無用れ  
抑したるしゆ多し婦女  
掃枝はらうとて頭よまら  
しと認りしとるへ

○寛永正保此  
比古画  
鼓弓は古製  
今と大  
異  
和漢三才図會  
鼓弓始於南臺  
今と大  
異



紫華足袋 十六

**和名鈔** 今按 野人 以鹿皮 為半靴 名曰多鼻 互用此單皮二字 乎一とらぬ  
足袋ハ革より製るが元なる昔 徳仁前ハ貴賤男女すべて革足袋と用ひたり文祿乃  
比古画とらるる小橋の紋有る革足袋とらるる男子有り紫華乃足袋と女子  
室町殿日記 十之卷 長一の奥方又用ひるておとせし註文乃うらと  
「むしとたび ひまのつらねたるうらしゆ付ひく 十足」とるをこそこれ 天文の

比之當時ハれきくれ婦人も紫華の足袋とらるるも **獨語** 我をくさ老の  
中ハ慶長元和の比生もさるりの男も女れもして寛永此あらと年れ盛を經り  
とらるる男ハ冬革のうらかけ革靴と美服と一女の紫の革乃襪子とくくを  
けくはとらりしとらるる襪子ハ我とさかた時 天和のまをものりて何なり云い「こ  
又尤之双紙 慶安二 上之卷 紫花物乃おくとらるる 童一人有り云い 紫麻子の  
小袖さくくを紫花物一帯紫花の衣とらるる云い」これを寛永慶安此あらハ

けくはとらりしとらるる襪子ハ我とさかた時 天和のまをものりて何なり云い「こ  
又尤之双紙 慶安二 上之卷 紫花物乃おくとらるる 童一人有り云い 紫麻子の  
小袖さくくを紫花物一帯紫花の衣とらるる云い」これを寛永慶安此あらハ



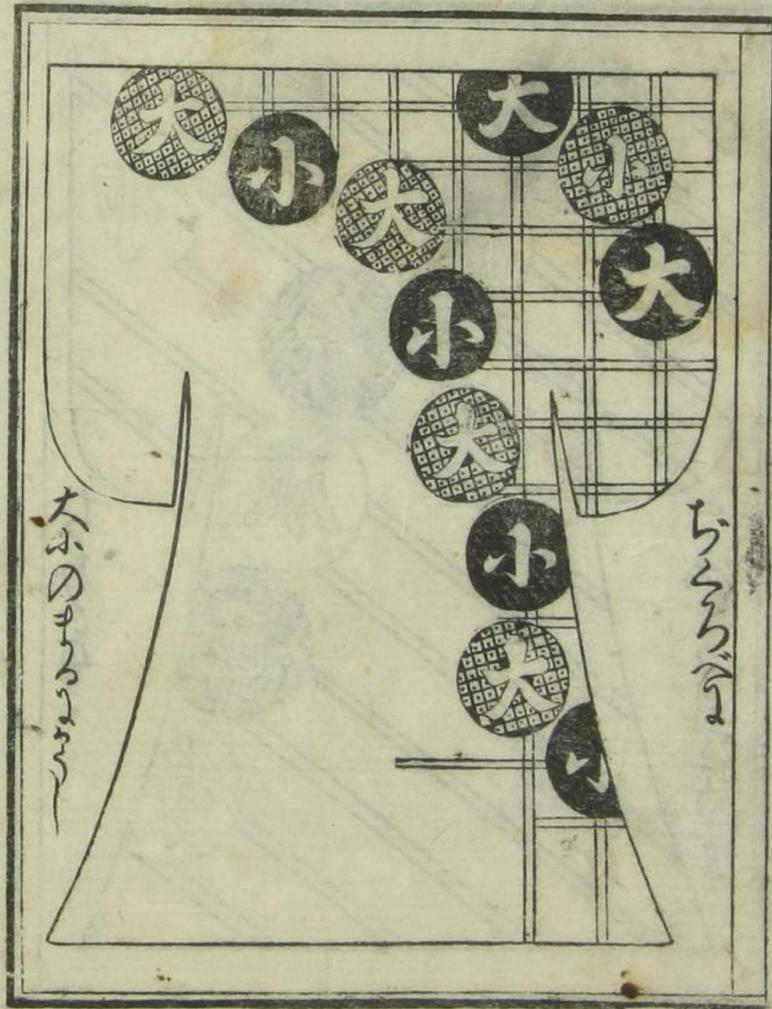




同書所載

右此阜圍此雜形と  
符合するものと其の  
の流行とをみる

天和貞享此の印本  
女重宝記といふ物の  
一の巻より友禪流れ  
九はく「云」とあり  
これも一證とすべし



ちんちんぐま

大小のちんちんぐま

題目踊園詩繪香合

綴て沃掛地之蓋れ画  
此詩繪わりたる  
圓れ如し



按るに是寛永時代れ古きなり洛北修学  
寺村或ハ松崎等此題目踊の巻を  
廊に懸るたるは丹前草子より  
松の葉に松十卷之三絃鳥組此歌  
京で一糸軒屋の娘四ッ刺帯とたるは  
かけといふも腰がまかやうか  
則是るをこれといふも三絃は本  
但しこの時代の依作り出で時れ歌るは  
寛永れ時代よりより少女ひひと  
とれ盤といふもいふもいふも  
寛永より寛永元平より今文化十年  
ふいふといふも百九十年かへり





受ノ四  
字語ヲ  
ナサス  
追テ根  
本雜事  
ヲ可考  
但シ天  
授ハ  
提婆  
多ヲ云  
名義集  
ニ見ユ

承ノ道云々。是則 酉陽雜俎續集の。旁色ヲ得ル。金椎子と。和漢相似

合戦と云童話の原と稱グ。義楚六帖 四十五。根本雜事云。有隱人。

在果樹下坐。被狝猴擲果。破額。忍之。不報。後有獵者。與仙人為友。來

在樹下坐。擲如前。獵者怒。射之。致死。佛與天受。かくんえら。按。猿蟹

合戦の語。此果樹と根として。枝葉とて。童話の原と云。かくんえら。按。猿蟹

合戦の語。此果樹と根として。枝葉とて。童話の原と云。かくんえら。按。猿蟹

合戦の語。此果樹と根として。枝葉とて。童話の原と云。かくんえら。按。猿蟹

合戦の語。此果樹と根として。枝葉とて。童話の原と云。かくんえら。按。猿蟹

合戦の語。此果樹と根として。枝葉とて。童話の原と云。かくんえら。按。猿蟹

合戦の語。此果樹と根として。枝葉とて。童話の原と云。かくんえら。按。猿蟹

合戦の語。此果樹と根として。枝葉とて。童話の原と云。かくんえら。按。猿蟹

合戦の語。此果樹と根として。枝葉とて。童話の原と云。かくんえら。按。猿蟹

合戦の語。此果樹と根として。枝葉とて。童話の原と云。かくんえら。按。猿蟹

○ちまき馬 さうり牛 三十三

散木集

ふとあさしらののちまき馬とりのとて

承源法師

ちまき馬はひのひのさうり牛

附 此のちまき馬はひのひのさうり牛

ちまき馬はひのひのさうり牛

このちまき馬と千枚馬はひのひのさうり牛と木賣れ牛はひのひのさうり牛と

會ふ菰或は瓜茄子と牛馬と造りて手向はひのひのさうり牛と

朝臣れ集之俊頼朝臣の鳥羽院の清宇天仁の比の人をたてしと

おろそ七百 盛はかり今信濃常陸下総かど此國くまで菰みちひのさうり馬とつ

ふ手向はひのひのさうり牛と手向はひのひのさうり牛と

七夕縁河まじかり。あつ七月多れた。そふさうりて靈棚ふ手向はひのひのさうり

七夕縁河まじかり。あつ七月多れた。そふさうりて靈棚ふ手向はひのひのさうり

七夕縁河まじかり。あつ七月多れた。そふさうりて靈棚ふ手向はひのひのさうり

手向うが前ゆく。七夕み手向うが後。とまんりくまれきまかり。

○奈良の庭竈

世間胸算用 元禄五年印本 卷之四云。正月奈良中の家くふをいりて。釜ひて焼火して。を不敷物してその家内は形も下人もむしりか樂居して。不ぬの居るの要く。雨乃かろりして。病み入る丸餅とを火して焼喰いし中。くらくん。くらくん。くらくん。昔の庭竈はる考へれり。これ前ふ地火炉の遺風を云。

○元禄二年の夕

五元集拾遺 庭慮ふて修ふ氏や庭竈 芭蕉 其角

瓶木の匂も何となく。庭竈へ奈良のふのくさくさ。火蓋奈良其原もや何となく。

○江戸吉原ふ今も正月を焼火し。くま。何り。これふさく。附會の説と。くも。実を竈に遺風を云。昔はくひ。様とは。奈良のを竈乃。くひ。元吉原の

比らう傳へる。勢はかく。く。今へを焼火するの。

○長崎柱餅并辛木

世間胸算用

卷之四ふ長崎の年暮の事

とくつ。柱を。して仕舞ふ。く。大く柱を。つけて。正月十五日に。長崎の。餅。其家。の。餅。昆布。糖。牛蒡。大根。ニ。日。つ。餅。乃。此。木。つ。て。竈。と。み。を。大。日。夜。入。れ。を。餅。乃。ま。で。つ。て。大。又。當。年。此。元。禄。年。中。の。餅。と。延。命。袋。の。形。つ。て。大。黒。柱。打。つ。て。落。す。を。わ。づ。ら。す。

○宗祇の蚊帳

三十五







- 六 ひなの名義ひなの假字
- 七 離遊のそと
- 八 離社 離合
- 九 源氏物語の離花
- 十 古書ども小見えー離花
- 十一 ひなの調度
- 十二 ひなの衣
- 十三 古製離図
- 十四 室町家の比の離図
- 十五 伊勢の小朱離
- 十六 離遊 三月三日小見えまりー考
- 十七 唐の時三月三日饅人ありし事
- 十八 ひなの繪櫃
- 十九 享保の比の土離図
- 二十 離の使図
- 二十一 離梳折敷図
- 二十二 後離の考
- 二十三 姫凡の離
- 二十四 ひのか草

下之巻 後

- 一 子日の離遊
- 二 贖物のひいな
- 三 勸進比丘尼の繪解
- 四 屏風の古画
- 五 端午の茅卷馬
- 六 端午の頭巾篠簾小人形
- 七 端午のあざり花
- 八 ろうぎの念佛の古図
- 九 後妻打考同古図
- 十 比比丘女
- 十一 酸漿を吹あうと事今よりあそ八百年
- 十二 小児をかごとよむおとりの考
- 十三 かくれねび
- 十四 手鞠考
- 十五 たまごの牛馬
- 十六 上古中古近古の女の髪
- 十七 上古中古近古の編笠の考
- 十八 船なまごの踊
- 十九 椀久塚牛かろ一坂
- 二十 廿お国哥舞妓の古図并考
- 二十一 今云く玉のり

再考標目

- 一 紺屋の白袴再考
- 二 竹馬再考

勸進聖判職人哥合



小引のゆゑに、つづくに述杖がまゝに、つづくに 粥杖あじ杖 離遊考の引書をたよたよ 奉て、  
 前帙二巻と趣の異ちがひあるをまゝに、たゞ 但書籍の年序ねんじゆのゆゑに、ひら 引  
 用もちの次つぎに、あ ありてあるを、せり せり。

▲ 述杖ゆりくの考引書

- 萬葉集
- 事物紀原
- 源平盛衰記
- 袖中抄
- 遊学往来
- 下学集
- 蘆囊抄
- 本草啓蒙
- 續日本後紀
- 遼史
- 平家物語
- 日本歳時記
- 訓蒙図彙
- 世語問答
- 和漢三才図會
- 三才圖會
- 和名鈔
- うつほの物語
- 義經記
- 流れく草
- 源氏物語
- 中山傳信録
- 滑稽雜談
- 年中定例記

▲ 粥杖考引書

- 清少納言草紙
- 増鏡
- 日次紀事
- 年中故事要言
- 和名鈔
- 日本紀
- 古事記傳
- 源氏物語
- 狄衣
- 紫式部日記
- 狄衣
- 契沖雜記
- 釋日本紀
- 齊宮女御集
- うつほの物語
- ささきおぼや
- 清少納言草紙
- 并内侍日記
- 日本歳時記
- 婦人養草
- 簾中舊記
- 玉かほま
- 厚顔抄
- 中務集
- 榮花物語
- 増鏡
- 濱松中納言物語

▲ 離遊考引書

- 和訓栞
- 日本風土記
- 下紐
- 日本紀
- 古事記傳
- 源氏物語
- 狄衣
- 紫式部日記
- 契沖雜記
- 釋日本紀
- 齊宮女御集
- うつほの物語
- ささきおぼや
- 清少納言草紙
- 并内侍日記
- 日本歳時記
- 婦人養草
- 簾中舊記
- 玉かほま
- 厚顔抄
- 中務集
- 榮花物語
- 増鏡
- 濱松中納言物語



山東庵主人著

雜劇考

前編 二冊 古代の雜劇を考へめらるる  
後編 二冊 古画古圖を載り

近刻

文化十二年甲戌冬十二月發行

天保七丙申年春季吉日求版

大傳馬町二丁目

東都書肆 文溪堂 丁子屋平兵衛梓

和漢印章考

京山岩瀬百撰著

全六冊近刻

